

[研究ノート]

ラグビーの普及およびスポーツ施設の 開放事業に関する取り組み

早 坂 一 成

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

現代社会において大学スポーツ施設の開放事業やスポーツ教室の開催などが盛んに行なわれている。そのスポーツ施設の開放事業及びスポーツ教室の例として、瀬戸ラグビースクールとの交流会における事業の立案、実施と指導・支援を、ラグビーの精神（レガシー）の伝承、技能の向上の経過から、指導・支援する学生に得られる教育的効果及び事業が及ぼす競技の普及の可能性と今後のスポーツ施設の開放事業のあり方を考察する。

キーワード：ラグビー，交流会，施設開放

Enhancing Community Ties through Sports: The Development of Rugby and Sports Facility

Kazunari HAYASAKA

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

※本研究は2015年度名古屋学院大学地域志向教育研究費の補助を受けて実施した。

発行日 2016年12月31日

1. 背景及び目的

2011年度より本学スポーツ健康学部所属のラグビー部員を中心とした学生（以下、NGURFCと表記する）と瀬戸市及び周辺地域の幼児、児童、中学生から構成される瀬戸ラグビースクールの選手（以下、瀬戸RSと表記する）及び指導員との間で、互いに練習の機会を持つ瀬戸ラグビー交流会を年に1回開催してきた。その目的は、開催当初は本学のスポーツ施設を開放し、地域貢献及び大学及び瀬戸キャンパスにおけるスポーツ施設や本学ラグビー部のPRの場として機能させるべく事業の立案、実施の支援である。ラグビーは他のスポーツと同様、それ以上に大学、高等学校などの教育機関や1993年より設立されたジャパントップリーグなどにより、児童やジュニアプレーヤーを対象としたグラウンド開放や技能向上を目的としたラグビー教室、交流会が行われている^{1) 2)}。本学も2011年度当初は交流会への参加だけであった活動を2012年度からはNGURFCが事前に対象学年に対して到達目標の設定などの事前準備を行い、技能の向上の指導・支援に携わってきた。加えて、それらの活動に際し、ラグビーの持つ文化的要素、すなわちフェアプレー、スポーツマンシップの精神、アフターマッチファンクションなどを育ませるような指導・支援も内包できる活動³⁾を行ってきた。これらの活動は2019年ラグビーワールドカップ日本開催におけるレガシーの伝承としての活動に基づいている⁴⁾。ラグビーのレガシーとは商業的成功やその後に残る有形のものだけでなく無形のものであり、文化的、社会的に価値のあるものと位置付けられており³⁾、2015年度の事業はこれらの活動をさらに整理し、より充実した質の高い事業として行う必要性があった。

一方、実際に指導・支援を行ってきたNGURFCの活動から見ていくと、これまで自己の競技キャリアを振り返る機会の絶好の場所であると言って良い。なぜならNGURFCの60%以上の競技歴がラグビースクールから行ってきており、幼少時に同様の交流会を体験してきた、いわば一定の競技キャリア構築後の自己の振り返りの場として位置付けられると言えよう。

以上より本報告では2015年度のスポーツ施設の開放事業として、瀬戸ラグビースクールの交流会の取り組みを技能向上とレガシー伝承の経過とNGURFCが得られた教育的効果、さらに今後の普及の可能性とスポーツ開放事業の観点から考察することを目的とした。

2. 2015年瀬戸ラグビースクール交流会

6月7日（日）及び12月20（日）の午前10時から12時、瀬戸キャンパス第1グラウンドにおいて、瀬戸RS 80名、指導員35名、NGURFC 45名の約160人が交流会を実施した。

2-1. ラグビーの精神（レガシー）の伝播

地域交流、地域貢献、教育体験などを目的に、2011年度より瀬戸ラグビースクールの活動を瀬戸キャンパス第1グラウンドに年1回誘致（12月）、その活動に対し本学ラグビー部の学生がサポートするという形式で交流会をスタートした。その後2012年度も同様の活動を行い、2013年

度には年2回（6月、12月）、2014年度には交流会に加え、中学生の瀬戸市民大会の会場としても試行し、より多くの指導・支援の機会を設けた。さらに2015年度は、そのサポート体制を充実させるべく、ラグビーの普及およびスポーツ施設の開放事業に関する取り組みとして、瀬戸RSの活動目標、指導方針を十分にNGURFCに理解させる事前指導の機会を設けた。

瀬戸ラグビースクールの活動目標、指導方針は以下の通りである⁵⁾。

- ① ラグビーのおもしろさや楽しさを味わう。
- ② 心と身体をたくましく育てる。
- ③ 思いやりと友情の輪を広げる。
- ④ ラグビースピリット（One for all, all for one）・マナーを身につける。

これらの活動目標、指導方針はスクール設立の理念であるラグビー経験者がラグビーの素晴らしさを体験し、その魅力を次世代の子供たちにひとりでも多く伝えたいという願いからである⁵⁾。また、これらの活動目標、指導方針はラグビーの大原則であり、根底のアイデンティティと言ってよい。なぜなら競技規則においても、具体的なルールを示すことはもちろん、これらの精神をうたっている。以下そのラグビー憲章を示した⁶⁾。

- ・品位（INTEGRITY）：品位とはゲームの核をなすものであり、誠実さとフェアプレーによって生み出される。
- ・情熱（PASSION）：ラグビーに関わる人々は、ゲームに対する情熱的な熱意を持っている。ラグビーは、興奮を呼び、愛着心を沸かせ、世界中のラグビーファミリーとの一体感を生む。
- ・結束（SOLIDARITY）：ラグビーは生涯続く友情、絆、チームワーク、そして、文化的、地理的、政治的、宗教的な相違を超えた忠誠心につながる、1つにまとまった精神をもたらす。
- ・規律（DISCIPLINE）：規律は、ゲームに不可欠なものであり、フィールドの内と外の両方において、競技規則、競技に関する規定、そして、ラグビーのコアバリューの順守を通じて示させる。
- ・尊重（RESPECT）：チームメイト、相手、マッチオフィシャル、そしてゲームに参加する人を尊重することは、最も重要である。

競技を継続している選手にとって、これらの精神はおぼろげながら理解している程度であることは、筆者の日頃の指導経験により容易に想像できる。これらの精神を体現する言葉として用いられている、「フェアプレー」「ノーサイド」「One for all, all for one」「アフターマッチファンクション」のキーワードを口にして指導・支援することを事前指導において確認した。

さらに瀬戸RSの活動目標、指導方針活動、競技規則を理解させるために対象の学生にはレクチャーやグループワークなどの事前指導を行い、十分に現場で体現できるよう促した。また指導体制には、瀬戸RSの各担当人数に合わせ幼児から小学1～6年生、中学生の7グループに分け配置した。これらの決定はNGURFCの任意によるものである。つまり、各選手がどの発育過程でのサポートを希望するか、主体的に考えさせ決定した結果である。また実際のトレーニングセッション以外にも担当が必要であり、カメラ・ビデオ撮影、レポート作成などの担当も振り分けた。

2-2. ラグビーの技能向上の指導、支援

活動目標、指導方針を体現するため、さらに技能の向上を図るために瀬戸RSの2015年度指導要領に対しNGURFCが培ってきた技能向上の指針を検討、事前指導において共有して交流会に臨んだ。表1に瀬戸RSの指導要領に対するNGURFCの技能向上指針をまとめた。指針の基本として、指導・支援の対象が幼児、児童を中心としていること、また時間も限られていることから技能向上のポイントを「コール」で表すオノマトペの表現を使用することを原則とした⁷⁾。その際、あくまで指導は一過性のいわゆる「スポットコーチング」であるために、比較的長期的なコーチングが必要とされる項目は技能向上指針から除外した。またラグビーの公式、非公式な専門用語の詳細な説明は本報告においては割愛することとした。図1～3に当日の様子を示した。

3. 得られた効果

本交流会は2011年度より行っており、毎年前年の反省を生かし、より効果のある技能の向上を図ってきた。しかし、限られた時間内の活動であり、また指導員の方々の補助としてのコーチングのレベルも未達なNGURFCの指導・支援ということで、目に見える直接的な効果を得ることはできなかった。また瀬戸RSの活動目標、活動指針からも勝利至上主義から距離を置いた、選手たちの将来を見据えた教育的な配慮が大きいと感じる印象を得ていた。さらに指導・支援の現状を観察すると、特に幼児や小学1年生、2年生の技能が本来のジュニアの高いレベルではないことが感じられた。そこで2014年度までは、レクリエーションの支援に重点を置き、レクリエーションの活動指針を参考にティーチングに重点をおいて活動を継続してきた⁸⁾。そのような活動の中で、2015年度において、ラグビーのレガシーの一部、すなわち精神面での啓発指導・支援にも注視し交流の企画、運営を行った。その結果、対象者である瀬戸RSに対して、ラグビーのレガシーを練習、試合の中で指導・支援することができた。その結果はNGURFCのレビューで表2のようにあげられた。

このように事前にラグビーの精神やそれに則った瀬戸RSの活動目標、指導方針を理解、再確認することにより、指導・支援をスムーズに行うことが可能になり、振り返りの際にも、例年次回への反省、修正点にまでには至らなかったレビューを明確に行うことができた。例えば、本年度のレガシーの継承という観点から見れば、品位、結束の理解を高め、尊重との相違点をより明確に理解することにより、指導する側であるNGURFC自らのラグビーのレガシーに対する認識も向上に寄与すると言えよう。

一方、ラグビーの技能向上の指導・支援に関しては瀬戸RSの2015年度指導要領に対してNGURFCの指導指針、いわば指導のポイントを付け加えて指導・支援を行った。30項目の指導ポイントをNGURFC全員が理解して望むことは物理的に不可能である。また、指導ポイントを記したカードなどを携行して臨むことも競技の性格上不可能である。その結果、各担当が指導・支援の際、最低3ポイントに要点を絞った上で指導・支援を行った。その結果、一定のレベルで対象者である瀬戸RSにNGURFC指針を伝えることができた印象を得た。具体的には、以下の5

ラグビーの普及およびスポーツ施設の開放事業に関する取り組み

表1 瀬戸RSの2015年度指導要領に対するNGURFCの技能向上の指針

番号	項目	説明	NGURFCの技能向上の指針
1	動くトレーニングの実践	ゲーム中、相手も味方も常に動いていることを念頭に練習を工夫。	球技（ゴール型）の特性を实践、特に「頭を上げ続ける」意識を周知「ヘッドアップ」
2	スタート自分達で	ラグビーはレフェリーの笛で始まるのはキックオフだけ。練習スタートは笛でなく味方の声で。	練習スタートのコーリングの実践「リスタート」
3	ストロングポジション	相手の重心へ体重をかける。	両足が常に前後している状態の継続「ドライブ」
4	引っ張らず押す	引っ張ってもボールは取れない。	ボールの獲得以上に地域の前進が重要「ドライブ」
5	顔を相手に近く	十分に力が伝わるように。	4同様地域の前進が重要「ヒット」
6	顔を味方に近く	ボールを相手から離す。	相手→ボール→味方の関係「マイボール」
7	ボールの真上から入る	オフザボールを回避。相手はボールに近くにいる。	ラック時オンザボールの意識「オーバー」
8	押し切れなかったらスリップダウン	手の力と体重を利用してスリップダウン、ボールは両手で押さえる。	正確なボールプレゼンテーション「ダウンボール」
9	攻めはラック、守りはモール	パイルアップした時のボールの行方、味方にボールが見えるように。	ラックの「オーバー」、モールの「ホールド」の徹底
10	スweepはボールと相手の手を見る	相手の手を切りながらスweep。	コンタクトシチュエーション時の「ヘッドアップ」「オーバー」
11	姿勢を低く	ひざを曲げよう。	膝とともに肩のライン「フラット」
12	タックルの入り方	両肩が開かないように力が相手に伝わるように。	タックルシチュエーションに入る
13	スweepはボールと相手の手を見る	相手の手を切りながらスweep。	10と同様、「ヘッドアップ」「オーバー」
14	スタートのイメージ	両足立ち 前に倒れるぎりぎりまで引っ張ってスタートするイメージ。	防御の初動で使用する「ノミネート」「アップ」
15	走る時の膝	膝が外側や内側に逃げてないか、力が十分伝わっているか。	14と同様
16	走る時の視線	味方を見るのは必要だが相手がどこにいて穴がどこにあるのかを見る。	ランニング際も「ヘッドアップ」
17	声のタイミング	至近距離で言って反応できるのはほとんどいない。どこで声をかけるのか	コーリングの基本として積極的に「コール」する
18	ランダムパス	一列で先頭者は味方がとれるであろう位置にパス。上下左右。後ろのひとは声をかけない。グリッドの中でもアップでもOK。	除外
19	味方が来たらバックと前進	相手にヒットしたら懐を広く低く。味方が来たらバックして一歩でも前進。	味方を孤立させないように「プレバインド」
20	攻める勢い	ボールを落とすなどあってもチームとして前進を。右左に一人で走り回ってもチームとして前進できなければ疲労。	流れないランニング「ストレートラン」と相手防御を引き付ける「スペースング」
21	ポジション	割愛	除外
22	用具	生徒たちが出すように。ボール、ダミー、コーン、ビブスなど。	大学生も一緒に準備を行う「セットアップ」
23	持ち物	タッチラインの傍においてよいのか、バラバラで良いのか。	除外
24	指導員	眼鏡ははずす。スパイクは固定ポイントで危険回避	指導員と同様の振る舞い「ベヘバー」
25	予想以外の対応	10のうち9はイメージと違うことが起こる。どうすれば対応できるか。バックアップするプレーヤーの位置。	どうい状況でも動くことができる「リンク」視野を広げる「ヘッドアップ」
26	ウイングの位置	防御ラインを突破されたら最終防御できるは反対サイドのウイング。コーザーフラッグに向かってまっすぐ走れば追いつく。	除外
27	追い方	相手に追従せず予測位置に直線で。	常に自分の対象を認識する「ノミネート」
28	試合前の気持ち	伝統的に後半の後半にならないと気持ちが入らない。試合前から気持ちが入るように持っていこう。	どこのチームの同様の傾向がある「メンタル・モチベーションアップ」
29	生徒への声がけ	3回NGなら次はGOOD job。	美点凝視で「モチベーションアップ」
30	指導員	目一杯一生懸命楽しそうなところを見せよう。	指導員と同様「楽しむ」
31	情報伝達	割愛	除外
32	パスと手の方	ストレートパスは両手の小指がそろって相手に向くように肩の高さまで。スピンパスは親指が揃うように。	大切なものを相手に渡す「ホスピタリティーマインド」
33	キック	ボールは上げないで落とすだけ。ヒットするときだけでよいので足首を固める。	自分の添えた手をキックするように



図1 交流会の様子1



図2 交流会の様子2



図3 交流会の様子3

表2 レガシーの指導・支援の結果

品位 (INTEGRITY)	<ul style="list-style-type: none"> ・フェアプレー:倒れている味方、相手に関わらず手を差し伸べて立ち上げた。 ・レフリーにノーサイドの挨拶ができた。 ・相手にノーサイドの挨拶ができた。
情熱 (PASSION)	<ul style="list-style-type: none"> ・試合に集中して楽しめた。 ・試合後もラグビーがもっと好きになった。
結束 (SOLIDARITY)	<ul style="list-style-type: none"> ・試合の最中、味方を信頼できた。 ・試合の最中、相手を尊重できた。
規律 (DISCIPLINE)	<ul style="list-style-type: none"> ・セルフジャッジをしなかった。 ・タッチラインやゴールラインをよく見た。 ・練習で笛に対して素早く反応できた。
尊重 (RESPECT)	<ul style="list-style-type: none"> ・品位及び結束と同上。

点がついて、振り返りの事後指導の際に、簡潔なオノマトペ的表現で用いたキーワード⁷⁾を瀬戸RSが使用し始めた印象を得た。

- ・技能全般において必要な相手、味方プレーヤーと自身の位置関係を認識するための広い視野を維持するため、視線を常に上げておくための「ヘッドアップ」
- ・身体接触を伴うボールの継続を適切な動作、テンポの良いスピードで行うための「オーバー」
- ・攻撃時ボールを持って前進する際、適切及び安全な動作を行うための「ドライブ」
- ・防御の際、確実に相手をマークし、味方と連動して防御ラインを破られないようにコミュニケーションをとる「ノミネート」
- ・防御の際、相手の前進を最小限に防ぎ、出足の速いスタートを切るための「アップ」

これらの項目に関してはラグビーの競技構造を成り立たせる基本的な技能をキーワードにしてあらわしたものであり、競技規則上公式な用語ではないものの、それらのキーワードを共有することにより、チームの規律形成の一助となり、さらには帰属意識の涵養につながる事が期待される。

一方、スポーツ施設の開放事業として交流会を企画、運営することにより、これらを指導・支援する過程において、地域貢献としての活動として瀬戸RSや指導員、保護者とコミュニケーションを構築することはもちろん、NGURFCの活動として、広義にはティーチング、コーチング、レクリエーション支援の学修の場として機能することが示唆された。さらに、これらの指導・支援がレガシーへのフィードバックと同様、競技キャリアの振り返りの場となり、技能の向上、技能の共有の可能性が期待される結果となった。

4. 今後の課題

本報告はラグビーの普及およびスポーツ施設の開放事業に関する取り組みに関して瀬戸RSとの交流会における企画、運営、指導・支援によって得た効果をまとめた。今後の課題を以下3点にまとめた。まず、1点目は活動の数量化である。2011年度から活動を継続してきた。それまでに前年度のレビューを参考に、より効果がある指導・支援を行ってきたが、研究の結果としては十分に得られてはいない。スポーツ施設を開放した事業の報告は散見されるものの¹⁾、それら活動に対する指導・支援の結果が数量化され、パフォーマンスの向上や対象と指導・支援する双方の側に教育的な効果を示すことは、今後のスポーツ施設の開放事業を促す一助になるであろう。そのためには検証可能な評価指標を事前に作成することが必要であり³⁾、その指標の検討が求められる。

2点目は、ラグビーに向けた普及への取り組みがあげられる。日本のラグビーは2019年に日本開催予定の第9回ラグビーワールドカップへ向けて競技力の強化を図っている。その成果は2015年開催の第8回大会において3勝1敗の成績を収めたことに裏付けられる。この成績は第1回大会から出場しているものの、1勝21敗2分けの結果に終わっている日本にとって、期的な競技力の強化を果たしていると言える。さらに2016年に開催されたりオジャネイロオリンピックにおいては、初の開催となる7人制ラグビーにおいて、共にアジア予選1位、球技で唯一の男女チームの出場を果たし、男子においては4位の成績を収めた。社会の関心が高まり、2011年ニュージーランド開催の第7回大会においては、日本での大会期間中の報道時間が3時間程度であった一方で、2015年の第8回イングランド大会は64時間と飛躍的に報道量が増加する現象を巻き起こした⁹⁾。このような、いわばブームの中で確実に競技人口を増やし、ラグビーの大衆化¹⁰⁾を図るためには、競技力の高いレベルと競技力向上を図っている集団が交流することにより、競技人口の定着を促す機会と成り得ると推察される。さらに愛知県を中心に東海地区では、女子のジュニア選手の増加が認められ¹¹⁾ ¹²⁾、女子選手に対する指導・支援の交流の場として機能することも期待される。

3点目はスポーツ施設開放事業の規模の拡大と多角化である。本事業はラグビーの瀬戸RSとNGURFCとの交流会に限定して行ってきた。2014年度の活動までは名古屋ラグビースクールや長野県のラグビースクールに一部が参加した機会があったが、大学とラグビースクールの交流会という限定的な活動であった。今後は中学生、高校生と交流会、大会開催等規模を拡大し、より一層充実した開放事業を開催することが、前述の競技の普及や競技がジュニアレベルの選手に定着する機会と成り得よう。特に中学生に関しては瀬戸市の8公立中学校のうち4つの中学校に運動部活動としてのラグビー部が活動している。これは全国的に見ても例を見ない。中学校の保健体育学習指導要領に領域として明示されていないラグビーが、地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができるとした¹³⁾、地域の事情を鑑みて授業等でも取り上げられる機会の一助として期待したい。さらに、こられる事業が他の種目や内容にも拡大し、スポーツフェスタなど規模が拡大していくことは、さらにスポーツ施設開放事業が求められている姿で

あり¹⁴⁾、本報告をもとに今後の事業のあり方を探求、実践していくことが責務である。

参考文献

- 1) 村上裕二 (2015):地域との共生を目指して:早稲田スポーツフェスタ in 東伏見における取り組み, 大学時報, 64(361), 52-55
- 2) 東芝BRAVE LUOUS (2016): <https://www.toshiba.co.jp/sports/rugby/topics/index.htm#t160628b>
- 3) 廣瀬恒平 (2014):ラグビーフットボールに関する社会学的研究—2019年ラグビーワールドカップにおけるレガシーに着目して—, 国際武道大学紀要, 20, 113-116
- 4) 西機真, 上野裕一 (2015):ラグビーワールドカップ2011 ニュージーランド大会におけるレガシー, 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 8, 55-62
- 5) 瀬戸ラグビースクール (2016): <http://setorugbyschool.com/>
- 6) IRB (International Rugby Board) (2016): 競技規則, 10-23
- 7) 藤野良孝, 井上康生, 吉川政夫, 仁科エミ, 山田恒夫 (2005):運動学習のためのスポーツオノマトペベース, 日本教育工学会論文誌, 29, 5-8
- 8) 日本レクリエーション協会 (2014):レクリエーション支援の基礎—楽しさ・心地よさを活かす理論と技術, 274-313
- 9) テレビスポーツデータ年鑑2016 (2016):ニホンモニター株式会社, 19-22
- 10) 森川貞夫, 佐伯聰夫 (2009):スポーツ社会学講義, 158-169
- 11) 寺田泰人, 岡本昌也, 高田正義, 廣瀬かほる, 寺田恭子 (2015):女子ラグビーの現状と今後の課題—Japan Women's Sevens 2014 出場チームのアンケート結果より—, ラグビーフォーラム, 8, 65-72
- 12) 寺田泰人, 岡本昌也, 高田正義, 廣瀬かほる, 寺田恭子 (2015):愛知県ラグビーフットボール協会における女子ラグビー強化の取り組み—国民大会での正式競技としての導入に向けて—, ラグビーフォーラム, 8 (Supplement), 19
- 13) 文部科学省 (2008):中学校学習指導要領解説 保健体育編, 141-143
- 14) 沖村多賀典 (2014):スポーツ・健康分野における大学の地域貢献について, 名古屋学院大学研究年報, 27, 41-52